

ARTIST 2025 FELLOWSHIP activity report

2025年度 ACY アーティスト・フェローシップ助成 活動報告書



Aki Iwaya
「対話の場」の様子 (2026年1月、アートスタジオ アイムヒア)
Photo: 金川晋吾



城戸 保
「富士と無意味」(2026年1月、左近山アトリエ131110) 会場風景
Photo: 城戸保



アーツコミッション・ヨコハマ

INDEX

2025年度の活動について

04 公募概要

05 申請概況

ACYアーティスト・フェロー

08 Aki Iwaya

16 城戸 保

24 小林 勇輝

32 安田 葉

40 継続補助事業

42 2025年度振り返り

ABOUT ACY

アーツコミッション・ヨコハマ(ACY)は、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団が運営する「芸術文化と社会を横断的に繋いでいくための中間支援」のプログラムです。

横浜でアーティスト、クリエイター、大学、NPO等の創造の担い手が多様な領域と協働して横浜の歴史・文化・環境を読み解き新しい価値をつくっていくため、ACYはこれらの創造の担い手の環境を調べ、またこれらの担い手のネットワークを構築し、協働を促しています。

ARTIST FELLOWSHIP

アーティストの創作や発表を通じたキャリア形成を支援するプログラム

日々新しい表現を追求し、構想を磨き、創作活動に取り組むアーティストを対象とし、ACYは横浜の文化資源や人的ネットワークを活用した多角的なサポートを提供しました。

公募概要

助成趣旨	<p>本プログラムでは、アーティストの創作や発表を通じたキャリア形成を支援することを目的としています。資金使途は活動内容に応じて柔軟に提案いただけますが、活動の一環として横浜各地での短期滞在と地域住民と交流する活動が必要となります。</p> <p>ACYは、アーティストにとって、横浜の風土、歴史、文化を調べることや、滞在を通じて人々と会話を交わし、交流することが、作品の成熟や創作アイデアの発見などにおいて良い影響をもたらすと考えています。また、そのアーティストの活動が、地域住民にとってアートに触れるきっかけとなり、日常に新たな価値や視点をもたらすことを期待しています。</p> <p>本プログラムにおいて、ACYはアーティストの活動を支えるため、横浜の文化資源や人的ネットワークを活用した多角的なサポートを提供します。</p> <p>日々新しい表現を追求し、構想を磨き、創作活動に取り組むアーティストを対象とします。都市・横浜の環境を応用しながら、多様な人々と交流し、予測不能な化学反応を生む創造的な活動に挑むアーティストを募集します。</p>												
対象	<p>趣旨にある活動を行い、かつ、以下の条件をすべて満たすアーティスト個人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・美術、舞台芸術の分野において活動するアーティスト ・過去のACYによる助成プログラムにおいて、申請者として採択されたことがないこと 												
提案内容	<p>下記すべてを含むキャリアアップにつながるリサーチや滞在制作、作品発表など、対象期間における創作活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象となる期間を通じた創作活動 ・ACYが指定する横浜市内の拠点での滞在(最短6泊7日) ・地域住民と交流する活動(公演、展覧会、試演会、ワークショップなど) 												
審査基準	<p>【独自性】芸術としての手法や形態、また思想や題材等、優れた発想や独自性を有しているか。</p> <p>【地域制】横浜で滞在をしながら創作または発表することの意義を有しているか。</p> <p>【実現性】計画および資金使途が明確であり、活動規模やスケジュールが適切か。</p>												
対象となる期間	2025年5月2日から2026年1月末日まで												
助成額	1,000,000円(定額)												
滞在拠点	<ul style="list-style-type: none"> ・アートスタジオ アイムヒア(横浜市南区弘明寺町259 GM2ビル2階) ・ARUNŌ -Yokohama Shinohara-(横浜市港北区篠原町1410) ・Co-coya(横浜市緑区中山5-9-1) ・左近山アトリエ131110(横浜市旭区左近山16-1 左近山団地1-31-110) ・Murasaki Penguin Project Totsuka(横浜市戸塚区戸塚町4247-21地下1階) 												
サポート内容	<ul style="list-style-type: none"> ・相談、情報提供 ・ACYの持つ人的ネットワークを活用し、活動の発展に必要な人や団体を紹介 ・滞在拠点における活動の支援 ・広報ツールの活用によるプロモーション支援 ・記録とアーカイブの作成 												
スケジュール	<table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%;">2025年 2月27日 募集開始</td> <td style="width: 50%;">2026年 2月14日 助成報告会</td> </tr> <tr> <td>3月5日 オンライン説明会</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3月12日 オンライン説明会</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3月18日 募集締め切り</td> <td></td> </tr> <tr> <td>4月26日 助成審査会開催</td> <td></td> </tr> <tr> <td>5月2日 審査結果通知</td> <td></td> </tr> </table>	2025年 2月27日 募集開始	2026年 2月14日 助成報告会	3月5日 オンライン説明会		3月12日 オンライン説明会		3月18日 募集締め切り		4月26日 助成審査会開催		5月2日 審査結果通知	
2025年 2月27日 募集開始	2026年 2月14日 助成報告会												
3月5日 オンライン説明会													
3月12日 オンライン説明会													
3月18日 募集締め切り													
4月26日 助成審査会開催													
5月2日 審査結果通知													

申請概況

ACYによる、アーティストのキャリアアップを支援するための助成制度は2016年度の開始以来、制度名称・内容の見直しを重ねながら、10回目の節目を迎えました。

過去、横浜にゆかりのある若手アーティストの支援を目的とし、年齢制限を設け、横浜市内に活動拠点を有することを条件としていましたが、2023年度にこれらの条件を撤廃し、「横浜市内での滞在」「地域住民と交流する活動を含むこと」を要件に加える形に見直しました。横浜の風土や歴史、文化を調べることや、滞在を通じて地域の人々と会話を交わし、触れ合うことが、作品の成熟や創作アイデアの発見などに良い影響をもたらすと考えているためです。今年度も多くの申請者から、この意図を読み解いた、横浜にまつわるリサーチや資源

の活用を含む提案をいただきました。

今年度は126名の申請があり、審査員による一次選考(書類選考)と二次選考(面談選考)を経て、4名を採択しました。

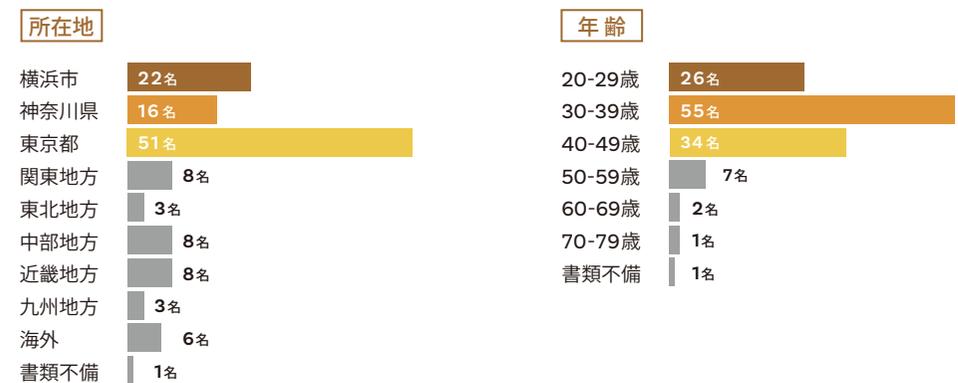
関東圏からの申請が中心ではあるものの、日本各地、海外からの申請も多く、他都市から横浜を見る視点を通じて、横浜の創造環境の可能性を感じさせることとなりました。

また、年齢制限を撤廃して以降も、30代の申請が最多となる傾向がありながら、幅広い年齢層からの申請が続いています。20代の申請が増え、若手アーティストからの注目が増えた一方で、中堅・ベテランのアーティストからのチャレンジングな申請も多くみられました。

審査員 (五十音順・敬称略)

天野 太郎	東京オペラシティ アートギャラリー チーフ・キュレーター
野上 絹代	振付家・演出家、多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科専任講師
藤原 徹平	フジワラテッペイアーキテクトラボ代表、横浜国立大学大学院Y-GSA 准教授
帆足 亜紀	横浜美術館 国際グループ 兼 学芸グループ グループ長 横浜トリエンナーレ組織委員会事務局 総合ディレクター 補佐

審査総評は下記よりご覧いただけます
https://acy.yafjp.org/wp-content/uploads/2025_souhyou-1.pdf



ARTIST 2025 FELLOWSHIP

Aki Iwaya

城戸 保

小林 勇輝

安田 葉

Aki Iwaya

Aki Iwaya

調査: 8/18(月)~8/25(月) @インドネシア

滞在①: 11/9(日)~11/14(金) @アートスタジオ アイムヒア

滞在②: 11/17(月)~11/30(日) @ARUNŌ

滞在③: 12/8(月)~12/13(土) @アートスタジオ アイムヒア

対話の場: 1/10(土) @アートスタジオ アイムヒア

活動概要

「人が集まること」と「対話」について探究するAki Iwayaは、インドネシアでのリサーチに加え、弘明寺・新横浜・黄金町に滞在しました。横浜では、地域住民やスペース運営者、研究者らへのインタビューを重ね、“横浜の人”との出会いを広げました。そこで得たネットワークをもとに、「対話とはなにか」をあらためて問い直す「対話の場」を開催。沈黙や言いよどみを含む記録のあり方を模索しました。



「対話の場」の様子 (2026年1月、アートスタジオ アイムヒア)
Photo: 金川晋吾



滞在中の様子 Photo: 大野隆介



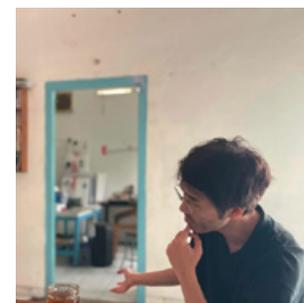
「対話の場」の様子 (2026年1月、アートスタジオ アイムヒア)
Photo: Ralph spieler

滞在拠点

ARUNŌ -Yokohama Shinohara- アートスタジオ アイムヒア

プロフィール

アーティスト。人が集まること&対話(沈黙/非言語含む)を探究し、芸術と社会的現実の摩擦を演奏する。寺子屋兼シェルターを住み開きしながら、アーツカウンシル東京の美術・映像及び芸術文化による社会支援分野調査員を務める。以降、防災・メンタルヘルス事業及び映像撮影やイベントと場を企画。また、「VS?collective」として海外コレクティブとの友だちの輪作りを行う。早稲田大学文学研究科現代文芸コース修了。『自分の「声」で書く技術-自己検閲をはずし、響く言葉を仲間と見つける』英治出版(企画監訳)、『コレクティブ&オルタナティブスペース-もうひとつの現実の作り方』刊行予定。





インドネシア滞在中の様子 Photo: Aki Iwaya



インドネシア滞在中の様子 Photo: Aki Iwaya



滞在中の様子 Photo: 大野隆介



「対話の場」の様子(2026年1月、アートスタジオ アイムヒア)
Photo: 金川晋吾

Q1 どのような活動をしていますか？

国内外でオルタナティブスペースやコレクティブに関するリサーチを、2015年頃から継続しています。海外のコレクティブと一緒にプロジェクトを行ったり、異なるコレクティブ同士をつなぐ活動もしています。国内では国分寺と高円寺を拠点に、対話の場やワークショップを開くことが多く、中学・高校で探究の授業を担当したり、企業・NPOの研修で講師を務めたりもしています。

関心があるのは、人がどのように集まり、関係性やネットワークがどのように立ち上がるのかという点です。

横浜の滞在期間中は、そのことに着目し、横浜の「場の作り方」と「ネットワーク」について、主にリサーチしました。横浜といっても大きな都市なので、複数の場の立ち上がり方の特性を比較することで、もう少し俯瞰的に考えられないかと思い、弘明寺や新横浜、黄金町など複数の地域でのリサーチを計画しました。

最終的には「対話の場」を開催し、当事者同士が出会い直す機会をつくることで、成果を自分の頭の中だけで完結せず、横浜に還元できるのではないかと考えました。

Q2 この助成をどう活用しましたか？

まずインドネシア・ジョグジャカルタを再訪し、継続的に関わっている現地のコレクティブと昨年からの活動の変化について意見交換を行いました。そこで得た気づきをもとに、今後の相互滞在やイベントなど協働の可能性について具体的に話し合いました。

横浜では、弘明寺や新横浜、黄金町など複数の地域でリサーチを実施し、ギャラリーやスペースの運営者、地域活動の担い手など50名以上に話を聞きました。テーマは絞らず、運営の工夫や困りごと、前向きな願いを丁寧に整理し、地域を越えて共通する課題や希望を見出しました。

その上で、意見をまとめることよりも当事者同士の対話そのもののプロセスを可視化することを重視し、実験的な「対話の場」をアートスタジオ アイムヒアで開催しました。空間の設えについては渡辺篤さんから助言を受け、心理的安全性を保つ配置や距離感などを学びました。また、対話の過程そのものを記録するためにアドバイザーとカメラマンと共に新たな記録方法を検討し、実践しました。

Q3 横浜の滞在・活動で得たものは？

東京を拠点に活動してきた自分にとって、横浜という別のネットワークを知れたことは大きな収穫でした。横浜は大きな都市でありながら地域ごとの特性がはっきりしており、それでいて横の連携がしやすいと感じました。東京以外での発表や地域への受け入れ方を具体的に知ることができ、新たな参照項ができました。

黄金町ではポッドキャストに出演し、弘明寺ではリレートークに参加するなど、外側から見るだけでなく、地域とアートが関わろうとする場を内側から体験できたことも大きな学びでした。新横浜で滞在した拠点ARUNŌでは、ひとつの建物の中に複数のコンテンツがあり、時間によって使われ方が変化していく構造を体感しました。それは「ぶんじ寮」という東京の拠点の構想に近い在り方であり、具体的なヒントを得ました。

今回の滞在を通して横浜に新たなつながりが生まれ、今後は東京や海外とのネットワークを拡張できる可能性も見えてきました。

Q4 今後の展望を教えてください。

滞在中から横浜とのつながりを一つのテーマとしてきたため、場の作り方に関する困りごとや今後やってみたいことをインタビューしてきました。結果として、キュレーターやまちづくりのプレイヤーと出会い、高円寺や国分寺、インドネシア、ヨーロッパなど自分が関わっている拠点とつなげられる可能性を感じています。すでに紹介したケースもあり、継続的に協働していく具体的なイメージを持っています。

執筆中の本では「人の集まり方を新しく捉え直すことで、チームやスペースが生まれるのではないか」という仮説を考えています。横浜での滞在を通して、地域ごとの持ち味や課題をより具体的に捉えることができました。海外でレクチャーツアーも予定しており、横浜や日本の事例をより解像度高く紹介できればと考えています。

また、対話については、自分自身の話をするを、ライティングだけじゃなく、トークで開拓できないかと考えています。写真家の金川晋吾さんと始めたポッドキャストを通して、リアルタイムの発話の中でどのような語りが可能かを、実験的に探っていきたいと考えています。

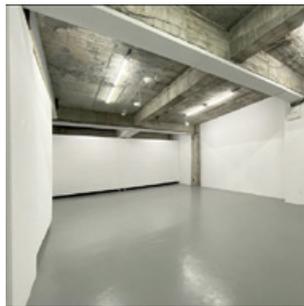


Photo: 渡辺篤

拠点運営者からのコメント

アートスタジオ アイムヒア

アイムヒア プロジェクトと株式会社泰有社の共同運営によるオルタナティブスペース。さまざまな展覧会／イベント／レジデンスプログラム等を実施している。

Q1 アーティスト滞在で得られたものは？

1月にアートスタジオ アイムヒアにて、「対話の場『ない横浜、演じてるあいだけある横浜?』」が開催されました。うちのスペースは、常設のエアコンが無いなど不自由さがある反面、普段大型作品を作る私の機材・資材などを提供しながら、自由に空間を作っていくことが特徴です。今回、私の自作こたつを用意したり、防寒対策を整えたりして後方支援させてもらいました。

私は日頃、活動を通じ、ひきこもり状態の方と関わる機会が多くあり、そこでも対話を重視していますが、Iwayaさんの対話に対する考え方や取り組み方には、共通項もあれば違いもありそうだと感じました。今後また話す機会があれば嬉しいです。

また、「対話の場」での、記録撮影に際し、個人的なカメラマンを何名も招集していたことが新鮮でした。あの日の会場の空気感がどのような記録として残るのか興味深いです。

今回、初めてうちのスペースを訪れる方も多くいましたし、イベント後にも様々な対話が発生していたようです。またIwayaさんには、ACYでの滞在以外でも、イベントに登壇していただき、横浜で様々な繋がりを作っていただきました。

渡辺篤

(アートスタジオ アイムヒア／現代美術家)

Q2 フェロウシップ助成の3年を振り返って

これまでこの拠点に滞在してきたアーティストたちは、みなさん、活動のビジョンを強く持っていました。そこで生まれるニーズにตอบสนองするなかで、空間の持つ可能性が広がり、また私自身にとってもアイデアや刺激をいただく機会になりました。今後も様々な才能や思想に触れられたらと思います。

アートスタジオ アイムヒアでは、先日、町のクリエイターや商店会長、お寺の副住職など約30人が集って各自のプレゼンや作品展示を行うイベント「弘明寺リレートーク」を開催しました。各自の専門知や感性を持ち寄ることで、人や街の魅力に気づく機会となりました。私はほとんどもと閉鎖的に作品制作に打ち込む期間が多くあるのですが、このアートスペースは、時として多くの人が集い交流による化学反応も生まれます。最近ようやく、当初理想としていた空間活用に近づいてきた実感があります。その背景には、フェロウシップ助成を通じたアーティストの活動や協働の経験も大きく影響しています。

今後も、自身の制作活動と並行して、若手アーティストの支援や、アーティスト・イン・レジデンスの主催、居場所の運営などもできたらと考えています。



Photo: 大野隆介

拠点運営者からのコメント

ARUNO -Yokohama Shinohara-

新横浜駅近くの旧横浜篠原郵便局を活用した文化複合拠点。「未知への窓口」をコンセプトにしたシェアスペースやカフェ、ポップアップテナント等からなる施設。

Q1 アーティスト滞在で得られたものは？

滞在中にインタビューを受ける機会がありました。とはいっても自分のことを話すだけでなく、Iwayaさんの普段の活動や思考と対話するような形で議論が膨らみ、とても新鮮かつ刺激的な時間でした。建築家でありながら場の運営から社会へ接続する私たちの試みは、アート界のなかでも彼が主題とするコレクティブと相性が良いことが分かり、建築界に閉じずにもっと自由に広範に、活動するフィールドを展開していく必要があるという視座を獲得できたように思います。

また、その場は日本だけでなく、彼の拠点の一つであるインドネシア・ジャカルタのような東南アジア圏、あるいは2015年にターナー賞を獲得した建築集団アセンブルのいるイギリスのような欧州のように、国境を越えて拠点を増やしていくことにもまた可能性を感じています。

二項対立の外側にあるオルタナティブを形成していくために、私たちも空間への向き合い方をいま一度見直していこうと思いました。

Q2 フェロウシップ助成の3年を振り返って

これまでの受入拠点である「ARUNO -Yokohama Shinohara-」だけでなく、篠原町内で「新横浜食料品センター」や「森庭山荘」と活動拠点が増え、イベント等を実施できる受け皿も同時に拡張しています。

ARUNOでは場所の性質上、受入アーティストが現地で取り組むためのスペースをなかなか確保しづらく、コミュニケーションも取りにくい環境になってしまっていたので、来年度からはより柔軟に自分自身もコミットしながらともに楽しんでいけるような場づくりができればと思っています。

これまで受け入れさせていただいたアーティストの方々とともに展覧会や共同プロジェクトを実施できれば本望ですが、そこまではいかずとも、継続的に繋がりを持っていきたいです。

そのためにはアートを受容する場の在り方がとても重要になりますが、私たちの地域でもそういった状況を生み出し、魅力的な環境にしていきたい所存です。

若林拓哉

(ARUNO -Yokohama Shinohara- / 株式会社ウミネコアーキ)

審査員レビュー 藤原 徹平

Aki Iwayaは、アーティストを自称する。アーティストとは、アート(芸術)とアクティビズム(社会運動)を組み合わせた語だが、アートと社会という、一見すると二項対立的な状況に分け入って、そこからオルタナティブな回路を探し出そうという彼の手続きそのものが言ってみれば、個性的であり、作品的であり、独特の輪郭を成している。

これまでACYが助成してきたアーティストという存在は、純粋な美術や舞台芸術の実践者が中心で、Aki Iwayaの足跡とは大きく異なる。では、助成に際して、私が何を期待したのかと言うと、拠点とは何か、拠点で起きるべき化学反応はどんなものであるべきかということを、改めて考えてみたかったということがある。

私は実際に彼と彼が呼んできたチームがデザインした「対話の場」に参加した。参加をして、もはやこれはパフォーミングアーツだなといういいかげんな感想を抱いた。そこに脚本はないが、Iwayaが選んだ数名が炬燵に座し、Iwayaが設定したルールに基づいて話をする。ルールは例えば、①相手が話しているときには聴くことに徹する。②相槌は打たない。③話に応答しなくても良い。

たったこれだけのルールで時空間は一変する。対話を聴いている聴衆＝観客にも影響が伝播したことは、対話の第3幕で観客全員が同じように

炬燵に座って話した際にそれぞれ感じたのではないだろうか。皆どこか知的に興奮していた。

また同時に、いかに日常の会話において相手の話を聴いていないのか、相槌という行為がいかに政治的なものなのか。会話と対話が何が違うのか、共話というのものもあるらしいとか、その後色々個人的にも学び続けるインパクトのある経験になっている。

Iwayaと何回か会話を交わして、彼のリサーチの中心にライフパッチとか、ルアンルパというような、インドネシアのアートコレクティブについての長期にわたる観察と関係性があることがわかった。世界で蠢いている「オルタナティブ」なネットワークへの持続的な関心と関係の構築への興味という土台があることで、彼の批評性の純度が保たれているのだなということがなんとなく想像ができた。

しかし、私はルアンルパとかライフパッチというような存在も今回初めて知ったし、そんなに偉そうに批評できる知見や見識があるわけでもない。自分でもRAUというラーニングコレクティブをたまに立ち上げたりしているのでコレクティブとはなんなのかを考える良いきっかけになった。

ひとまず彼が写真家の金川晋吾とやっているポッドキャストの収録が面白そうなので、観に行く約束をした。



「対話の場」の様子 (2026年1月、アートスタジオ アイムヒア)
Photo : Ralph spieler



「対話の場」の様子 (2026年1月、アートスタジオ アイムヒア)
Photo : 金川晋吾



対話の場」の様子 (2026年1月、アートスタジオ アイムヒア)
Photo : 金川晋吾



滞在中の様子 Photo : 大野隆介

2025							2026		
5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
ヒアリング	拠点下見		インドネシア滞在			拠点滞在	拠点滞在	対話の場	助成報告会
	黄金町エリアマネジメントセンターを紹介			日ノ出町の拠点運営者を紹介滞在サポート			審査員来訪調整		

城戸保

Tamotsu Kido

滞在①:10/31(金)~11/6(木)@左近山アトリエ131110

WS:11/1(土) @左近山アトリエ131110

滞在②:11/20(木)~11/23(日) @左近山アトリエ131110

滞在③:11/27(木)~11/30(日) @左近山アトリエ131110

滞在④:12/4(木)~12/7(日) @左近山アトリエ131110

展覧会:1/10(土)~1/25(日) @左近山アトリエ131110

活動概要

写真作家・城戸保は、横浜や横須賀を巡りながら、従来から取り組んでいる「富士景」シリーズを中心とした新作を制作しました。浮世絵をはじめとする日本美術史上の「富士山」を、現代的に更新する試みです。また、路上観察を通して無意味に見える状況や事物から美やユーモアをすくいあげる作品も制作しました。本活動の成果として、展覧会「富士と無意味」を開催しました。

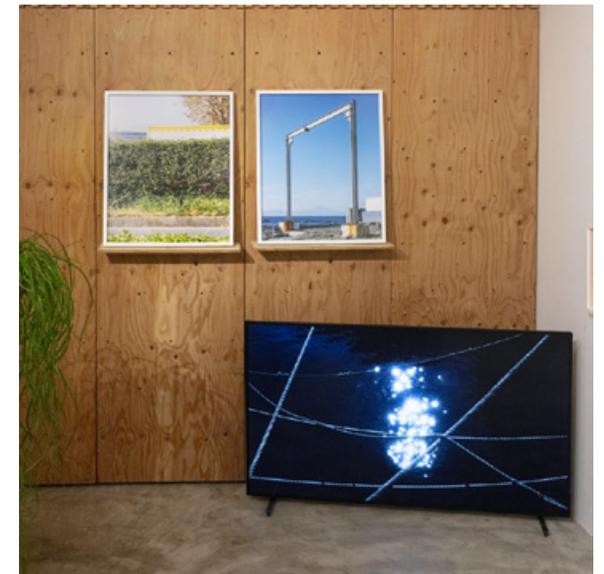


「富士と無意味」(2026年1月、左近山アトリエ131110)
会場風景
Photo: 城戸保

「富士と無意味」(2026年1月、左近山アトリエ131110)
会場風景
Photo: 城戸保



ワークショップの様子 (2025年11月、左近山アトリエ131110)



滞在拠点

左近山アトリエ131110

プロフィール

写真作家。日常の何気ない風景から世界の平衡と画面が均衡する重心を探り、光の現象と色彩が交差する特異な視点を確定することで、「見ることやある事の不思議」を作品化する。絵画に於ける明度や彩度のバールール操作を写真に応用し、多様な独自の写真技法を用いて「写真と絵画」の可能性を探求し、既存の「風景画」を更新させる取り組みを行う。





「富士と無意味」(2026年1月、左近山アトリエ131110) 会場風景
Photo: 城戸保



アーティストトークの様子(2026年1月、左近山アトリエ131110)



船上撮影の様子



「富士と無意味」広報物 Photo: 城戸保

Q1 どのような活動をしていますか？

写真家としての仕事をしながら、並行して作品制作を続けています。自分にとって写真は絵画の延長にある表現で、カメラを使って別の方法で絵を描いている感覚に近いです。近年は生活の拠点から少し距離を取り、日本という場所そのものに向き合う制作を行っています。モチーフとして選んでいるのが富士山で、時代が変わっても姿を変えない存在と、都市や建築の変化を重ね合わせて撮影しています。

横浜滞在でもその延長として、富士山をメインテーマに撮影を行いました。あわせて「駐車空間」「絵画建築」「文字景」「光画」など継続してきたシリーズを「無意味」という言葉で束ね、「富士と無意味」という展覧会を構想し、そこへと展開していくための制作を行いました。

Q2 この助成をどう活用しましたか？

制作拠点を横浜に置き、富士山のシリーズと「無意味」のシリーズを同時に進めることを目的に滞在を活用しました。富士山は雪が積もった姿で撮りたいと考えていたため、11月頃から天候を見ながら粘り強く動きました。

撮影場所は事前に少し調べましたが、最終的には車で移動し、自分の目で見つけることを大切にしました。戸塚の高台や本牧周辺など様々な場所を巡りながら、現在の都市の構造と富士山の関係を探りました。

特に印象的だったのは海上から撮影した富士山です。高層建築が多い場所では撮影が難しいのですが、船に乗り海上から撮ることで、高層建築越しに引きの構図で富士山を捉えることができました。葛飾北斎《神奈川沖浪裏》の構図も意識しながら、現代の横浜に立ち現れる富士山をどう表現するかを考え、それを本滞在のメイン作品に位置づけました。船の手配にも協力をいただき、滞在支援があったからこそ納得のいく作品を制作できたと感じています。

Q3 横浜の滞在・活動で得たものは？

横浜での制作は今回が初めてで、坂道の多さや港町としての風景がとても新鮮でした。「無意味」というテーマの撮影は港の方でたくさん行いました。みなとみらいを起点に南北へ移動しながら撮影を重ね、港では釣りをしている人の姿など、都市の中に残る余白のような時間に出会いました。

また、海上からの撮影の際に赤灯台を撮影できたことも印象的です。東京湾最古の灯台といわれているにもかかわらず、横浜の人でもあまり知られていない存在を可視化できたのは一つの成果だと感じています。

滞在場所の左近山アトリエでは、滞在前半はほとんど寝泊まりのみの利用だったため、何をしている人なのか分からなかったかもしれません。撮影のために朝早く出て夜遅く戻る生活でしたが、同拠点でのワークショップや展覧会を通して、ようやく活動の内容を伝えられたと感じています。左近山アトリエは、地域の方々とも自然に会話が生まれる場所でした。作品を介して多くの対話ができたと印象に残っています。

Q4 今後の展望を教えてください。

富士山を撮るシリーズは、これまで静岡や山梨など、富士山に近い場所で撮影をしてきました。今回、横浜で作品を制作したことをきっかけに、今後は東海道全体へと広げていきたいと思うようになりました。ただ、東海道五十三次と同じ場所で撮りたいのではなく、絵的におもしろいと思える富士山を撮りたいと思っています。私はもともと、変わらないものに惹かれています。富士山は昔の絵師が描いた姿とほとんど変わらず存在しています。

変わらないものと、時代とともに変わっていくものを、新しい見方で捉えることができれば嬉しいです。今後も「富士と無意味」を継続し、機会があれば横浜で作品を発表できたら幸いです。



Photo: 菅原康太

拠点運営者からのコメント

左近山アトリエ131110

大規模団地、左近山団地内ショッピングセンターの店舗を活用したアート拠点。ギャラリー・ワークショップ・カフェなど、屋外の広場とも連携し様々な活動を展開している。

Q1 アーティスト滞在で得られたものは？

城戸さんの作品は、城戸さんの目でしか見つける事のできない瞬間を写真に残すものでしたので、とにかく作品づくりの期間、いい天気になることを祈りつつ、スケジュールに出来るだけ沿えるよう宿泊調整させていただきました。

滞在中にワークショップを企画いただき、アーティストとしての写真へのこだわりや、思いなどを語っていただくことで、地域の方々と写真を撮る際の視点について、楽しく語り合うことができました。

そして、撮影された写真を年明けすぐに左近山アトリエ131110で展覧会として発表していただいたことに感謝申し上げます。カラフルで、無意味の中に美を感じる写真たち。時にはクスッと笑ってしまうようなものもあり、普段見ている景色や風景をちょっと違った視点で見ているのはいかが？と投げかけられているような写真展でした。日々の生活がより豊になるよう提案をしつづけている左近山アトリエ131110にとって、新年にふさわしい展覧会であったと感じています。また、新しいお客様もたくさん来て下さり、アトリエを知っていただける機会にもなりました。

熊谷恵美子
(左近山アトリエ131110/
株式会社スタジオ・ゲンクマガイ)

Q2 フェロウシップ助成の3年を振り返って

高齢化が進み、エレベーター無しの5階建、築50年以上経っている左近山団地の課題を解決していく為には、豊かな気持ちで左近山の暮らしを楽しめる住人を増やす事だと考えています。そして、その豊かな気持ちを育むためには、アートは欠かせないと思っています。

毎年違ったアーティストが左近山団地に住みながら作品をつくり、その作品を発表までしていただけた3年間は、団地再生を目的に活動している我々にとって、とてもありがたい機会でした。

ある人は、昔のように街の美術館まで通うことが難しいが、スーパーの帰りに立ち寄れる場所で芸術鑑賞ができて嬉しかったと言い、またある子供は、通学路でアーティストと出会うことが出来たと喜ぶ。展覧会目的で都内からいらしたお客様の数人には、そんな生活いいね。こんな団地に住んでみたいな。と言ってもらえました。

何気ない日常にアートがある団地として、これからもアーティストと一緒に団地の未来をつくれるイベントを仕掛けていきたいと思っています。

審査員レビュー 天野 太郎

城戸保は写真の表現を行ってきたアーティストで、今回はその表現手段を通して得られるであろう、横浜、あるいはその周辺の風景が、広く市民の方々に見慣れてはいるが、見落としているような風景の再発見を供する機会になると想定していた。

特に選考過程において、近年の城戸作品のテーマの一つである「富士山」に、葛飾北斎の《神奈川沖浪裏》を見立て新たな城戸解釈の「富士山」のイメージも期待した。

一方で、城戸作品のもう一つのテーマである、「無意味な風景」も横浜という都市の新たな側面を浮上させる可能性を見出す事になった。

日本の風景の歴史は、ある意味で「見立て」というフォーマットを持ってきた。「蝦夷富士」や「薩摩富士」と言ったように各地で、代表的な山を富士山に見立て鑑賞して来たり、「琵琶湖八景」なども中国の「瀟湘八景」の見立てである。

城戸は、言わば21世紀における「見立て」を実践して来たのだが、そこから、独特の解釈で

ある「無意味な風景」が引き出された。これは、1994年に、スペインのイグナシ・デ・ソラ=モラレス・ルビオーが、都市空間の中の機能性のない空き地を、むしろ都市空間の中の価値ある場を表象するもの=テラン・ヴァーグ(terrain vague)として概念化された事にも繋がる。

そして、今回の滞在制作で得られた一つの結論が、皮肉にも、横浜の都市空間の中に「無意味な風景」がなかなか見出せなかったのは、ある意味で示唆的であった。これは、左近山アトリエ131110の展示での城戸のトークでも語られ、参加者とも共有出来た。

最後に、プログラムとしては、こうした様々な都市風景の発見を城戸とともに、もう少し多くの市民が参加してもらおう工夫が必要だったと反省を込めて記しておきたい。

2025							2026		
5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
ヒアリング		拠点下見			拠点滞在	拠点滞在 WS	拠点滞在	展覧会	助成報告会
	船会社を紹介			滞在サポート		WS運営サポート 審査員来訪調整		審査員来訪調整 メディア紹介	



展覧会出品作品《赤い灯台》2025年



展覧会出品作品《木廻り》2025年



展覧会出品作品《戸塚富士》2025年



展覧会出品作品《黒猫富士》2025年



展覧会出品作品《豚とジャングルジム》2025年

小林 勇輝

Yuki Kobayashi

調査:6/23(月)~8/9(土) @中国

滞在:8/18(月)~9/8(月) @MPPT

WS:8/23(土) @MPPT

試演会:9/7(日) @MPPT

活動概要

小林勇輝は、2019年より継続する「詠春拳プロジェクト」を発展させるべく、中国武術の源流を辿る鍛錬とリサーチを実施しました。河南省嵩山少林寺の武術学校での修練に加え、中国本土および香港にて武術家コミュニティとの交流を重ねました。横浜においても中国武術コミュニティとの関係を築き、中国・台湾・日本を横断する武術の歴史と現在を探究。Murasaki Penguin Project Totsukaでは日々の自主鍛錬に取り組むとともに、地域住民との交流を深めるワークショップを開催し、滞在終盤には活動記録を交えた試演会を行いました。



「詠春拳プロジェクト」試演会の様子 (2025年9月、MPPT)
Photo: Yulia Skogoreva



「詠春拳プロジェクト」ワークショップの様子 (2025年8月、MPPT)



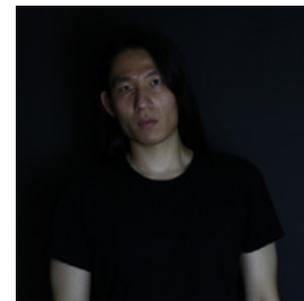
「詠春拳プロジェクト」試演会の様子 (2025年9月、MPPT)
Photo: Yulia Skogoreva

滞在拠点

Murasaki Penguin Project Totsuka

プロフィール

現代美術家・パフォーマンスアーティスト。自身の身体を中性的な立体物として用い、性や人種的な固定概念に問いかけ束縛や流動性を表現。また自由と平等の不確かな世界の制限的な社会的コードを疑いスポーツや儀礼をテーマにしたプロジェクト「Life of Athletics」などを通して人間の存在意義を探究する学際的パフォーマンス作品を発表。2019年パフォーマンス・プラットフォーム「Stilllive」を設立。2023年アジア・カルチュラル・カウンシル (ACC) 個人フェローシップ、ビジュアルアーツ部門受賞。2024年香港詠春體育会、袁炎強詠春國術會の両団体より師傅を授与され武術家としても活動を始める。





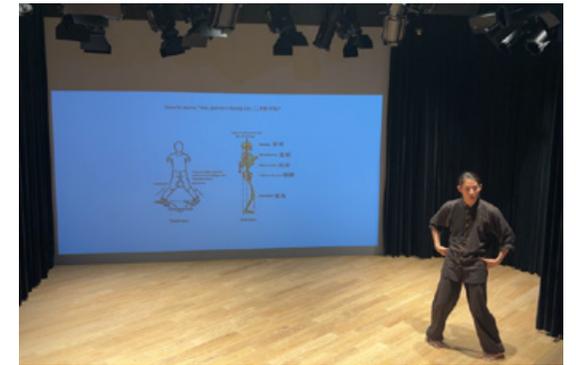
「詠春拳プロジェクト」ワークショップの様子(2025年8月、MPPT)



永春白鶴拳尚武館での交流の様子



丸太探しの様子



「詠春拳プロジェクト」ワークショップの様子(2025年8月、MPPT)

Q1 どのような活動をしていますか？

20歳でロンドンの芸術大学へ入学し、本格的に芸術教育を受け、アーティストとして活動を始めました。日本で高校までを過ごし、その後ハワイやイギリスで学ぶ中で、自分の存在や国籍、セクシュアリティについて深く考える時期がありました。身体を変容させるパフォーマンスを起点に、立体や空間へと展開し、性別や種別を超えるプロジェクトを行ってきました。

その後、10代でアスリートを目指してアメリカに渡った経験を活かし、スポーツ社会における身体性のアプローチからもパフォーマンスを実践してきました。

今回の滞在制作では、2019年に会った詠春拳をテーマにしています。福建省で女性によって生まれた拳法でありながら、歴史の中で男性中心の武術として広がった背景や、日中戦争の影響などの文脈に関心をもちました。詠春拳の歴史を自分の身体でどう継承できるのか、その実践自体を作品とする「詠春拳プロジェクト」に取り組んでいます。中国南部で生まれた武術を、日本に住む自分の身体を通して再解釈しています。

Q2 この助成をどう活用しましたか？

本フェローシップでは、大きく二つの実践を行いました。

まず、中国・香港での滞在です。これまで香港を拠点に鍛錬を続けてきましたが、今回あらためて少林寺の武術学校や福建省を訪れ、約30日間集中的に修練しました。現地の師や武術家との交流を通して、詠春拳や永春白鶴拳の歴史的背景を学び、その系譜を身体で経験する時間となりました。日本と中国を武術と身体を通して往復することで、自身の実践をあらためて位置づけ直しました。

横浜では、Murasaki Penguin Project Totsukaに滞在し、8月23日には、詠春拳の成り立ちや歴史背景を共有しながら、基礎的な手法を参加者同士で体験するワークショップを実施。9月7日には、これまでの訪問先や交流を辿るレクチャーに加え、伝統的な型の紹介や横浜滞在中に制作した木製立体作品を用いた独自の構成による試演会を行いました。

Q3 横浜の滞在・活動で得たものは？

「詠春拳プロジェクト」はこれまでギャラリーや美術館での発表はありましたが、劇場空間でパフォーマンスを行うのは初めてであり、現在地を共有する重要な機会となりました。ワークショップには地域で太極拳を学ぶ方々も参加くださり、武術を通じた新たな交流が生まれました。

また、作品に使用する丸太を探す中で銘木屋を紹介していただき、素材の背景を知ることによって、素材から制作を考える視点が生まれました。

さらに、今回ぜひ会いたいと考えていた横浜中華街「カンフーキッチン(工夫厨房)」の銭彦師父、無為気功養生会の廖赤陽老師とも出会い、継続的な交流につながっています。この出会いを起点に、中国や香港との関係も広がりつつあります。紹介を通して訪れた地域では家族のように迎え入れてもらう場面もあり、個人同士の信頼の積み重ねが交流を支えていることを強く感じました。

Q4 今後の展望を教えてください。

横浜の道場には現在も継続して参加しており、講師として招いていただく機会もありました。詠春拳を通じた関係が続いていることを嬉しく感じています。「カンフーキッチン(工夫厨房)」の先生との交流も今後育てていきたいと考えており、そこから台湾や中国との往来も広がっていく可能性を感じています。

これまで取り組んできたスポーツやパフォーマンス、インスタレーションと詠春拳の実践をどのように結び直していくかが重要だと考えています。道場という仕組みの中で武術的な空間を立ち上げましたが、そこに芸術的な視点をどう取り入れ、観る人の想像力を広げられるかを探ってきたいです。現在はスポーツ、カンフー、アートの三つの領域を身体で往復している感覚があります。武術の専門性が高まる中で、それを芸術とシームレスに接続し、自身の身体表現のメソッドを構築していきたいと考えています。



Photo: 堀越圭晋 (エスエス)

拠点運営者からのコメント

Murasaki Penguin Project Totsuka

2022年9月にオープンしたパフォーミングアーツとマルチメディアアートの新しい拠点。ダンスや演劇、音楽、映画など、さまざまな形態の作品発表が可能。

Q1 アーティスト滞在で得られたものは？

今年度は、小林さんが作品に使用する丸太を探すところから始まりました。私たちの拠点を協働する地元の建設会社・大洋建設株式会社に相談し、紹介を経て、新木場にある銘木屋を訪問しました。私たちも同行し、丸太が生産、加工、売買、運搬を経て、美術に用いられるまでのプロセスを知る機会となりました。木が育ち、伐採され、乾燥するまでに何十年もの時間がかかることや、必要以上の木を伐採しないよう未来の生産量を見据えて管理していることなど、長い時間軸で自然と向き合う姿勢を知り、木の見え方や概念がこれまでとは大きく変わったと感じています。

また、小林さんがワークショップの参加者を募る際には、これまでフェローシップ助成を通してつながった地域の方々にも声をかけることができました。さらに、武術という側面から、以前よりつながりのあった戸塚で長年、太極拳を教える先生にも協力をお願いし、多くの生徒の方が参加してくださいました。滞在するアーティストと地域の方々に関わる機会が生まれたことも、今回の滞在中を特徴づける出来事だと思っています。

黒田杏菜、David Kirkpatrick
(Murasaki Penguin Project Totsuka)

Q2 フェローシップ助成の3年を振り返って

フェローシップ助成で、初年度に滞在したアーティストが、積極的に地域の方々や施設を訪問し、拠点と地域のつながりを強くしてくださりました。今現在もプロジェクトは発展し続けていて、私たちも参加し、地域の方々との交流も本当に素晴らしい出会いをいただきました。

また、2024年度にACYによるツアーで他の拠点を見学できたこと、あわせて、ACYと九州大学中村美亜研究室の共同研究「アーティストの創作支援活動の価値を可視化する試み」に参加できたことはとても良かったです。

ACYのフェローシップ助成のような、地域に滞在する事に意味を見出す事ができるアーティストと、その地域の人たちと、芸術文化拠点をつなげるような助成制度が、横浜市をはじめ、他の地域にも活用されると、普段芸術文化に触れることが少ない人たちが芸術を身近に感じる機会が増えると感じます。そのような取り組みを通して、芸術文化がどうして必要なのか、言語を超えて共感できる人たちが広がっていく事を願ってやみません。

審査員レビュー 野上 絹代

私が現代美術家として活動する小林勇輝氏を推した理由は、中国武術が持つ動きの芸術性に着目した点にある。これまで自身の身体を「中性的な立体物」として作品にしてきた小林氏の活動をパフォーミングアートとして評価し、詠春拳の鍛錬、作品化に期待した。また、中華街にある飲食店(かつ、文化交流拠点でもある)カンフーキッチン(工夫厨房)での活動など、横浜における地域性が盛り込まれている点にも着目した。

選定後の活躍も目覚ましく、中国に渡っての修行・交流、横浜での交流・創作などを経て中国で開催された詠春拳の大会(永春功夫杯)でメダリストになってしまったというのだからACYも(私も)鼻が高いだろう。

9月にMurasaki Penguin Project Totsukaにて開催された試演会では小林氏が詠春拳の歴史について穏やかに、クレバーにレクチャーする姿に深く感銘を受けた。「問い」として残ったのは、家庭内の暴力や性暴力に対抗

するために女性によって作られた武術であるという詠春拳を、引き継いだのが全て男性であったという点だ。

そのジェンダーのねじれや闇のような部分が印象的で、小林氏は自身の身体を通してそのことの表現に取り組もうとしていたのだが、少し「急な」感覚を得た。例えば、小林氏がこれから女性、あるいは子どもや老人など対して振付をするなど、ジェンダーを意識したアプローチを慎重に進めることで、パフォーマンスとしての浸透力と可能性を広げていくのでは、と想像したりした。

とはいえ、この1年間で経験も人脈も、メダルまで手にした小林氏のことであるから、この先も大いに躍進してくれると期待する。

2025					2026				
5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
ヒアリング	拠点下見 中国滞在	中国滞在	中国滞在 拠点WS	拠点滞在 試演会					助成報告会
			滞在サポート WS運営サポート メディア取材調整	試演会運営サポート 審査員来訪調整					トーキョーアーツアンドスペース本郷での展覧会について広報協力 TERRADA ART AWARD 2025 ファイナリスト展についての広報協力



「詠春拳プロジェクト」試演会の様子 (2025年9月、MPPT)
Photo : Yulia Skogoreva



永春白鶴拳の資料
Photo : 小林勇輝



嵩山少林武術学校滞在の様子 Photo : 小林勇輝



「詠春拳プロジェクト」試演会の様子 (2025年9月、MPPT)
Photo : Yulia Skogoreva



「詠春拳プロジェクト」試演会の様子 (2025年9月、MPPT)
Photo : Yulia Skogoreva



香港滞在の様子



福建省蠅螂拳コミュニティとの交流の様子

安田 葉

Yoh Yasuda

滞在①:7/2(水)~7/8(火)

滞在②:10/1(水)~10/31(金)

WS「対話の凧」:10/18(土)、10/22(水)、10/23(木)

WS「あなたの凧」:11/4(火)@にいほる里山交流センター

制作:11/24(月)~1/20(火) @インドネシア

凧あげ:1/24(土) @鶴見川河川敷(緑区)

展覧会:1/25(日)~1/31(土) @Co-coya

活動概要

安田葉は、今回のプロジェクトを「Dialogue Kite」と題し、紙以前から存在するメディアである凧をモチーフに、横浜とインドネシアを拠点に活動を展開しました。中山のCo-coyaに滞在し、海外ルーツを持つ住民らとワークショップ「対話の凧」を実施。参加者と風や移動の記憶を共有しながら凧の形を共に構想し、5つの新作を制作しました。また、和紙と竹を用いてオリジナルの凧を制作するワークショップ「あなたの凧」も開催。両ワークショップで生まれた凧を鶴見川河川敷で実際に横浜の空にあげ、その後、個展「対話の凧」にて展示しました。



「対話の凧」(2026年1月、Co-coya) 会場風景
Photo: Naho Matsui



「対話の凧」(2026年1月、Co-coya) 会場風景 Photo: Yoh Yasuda



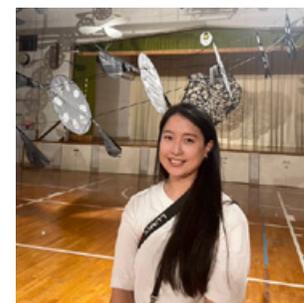
凧あげの様子(2026年1月、鶴見川河川敷)
Photo: Yushu Ido

滞在拠点

Co-coya

プロフィール

アーティスト。神奈川県海老名市出身。2014年東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。子どもの頃の記憶やデジタル化により失われつつある伝統文化に強く興味を持ち、世界各地で出会う人々に着想を得て、立体、映像、インスタレーションなどを発表している。母親がハタやバラモン凧で有名な長崎県出身で、幼い頃から凧作りに親しむ。2019年から東南アジアのカイト文化や、太平洋諸島の自然環境を研究し、持続可能な芸術表現としての凧を制作し、近年は世界各地の国際カイトフェスティバルに招待されている。





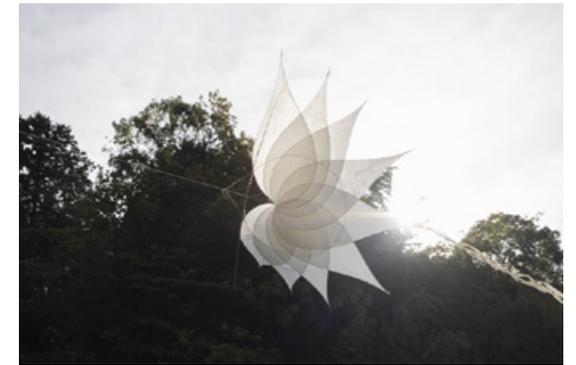
インドネシアでの制作の様子



ワークショップ「あなたの風」の様子
(2025年11月、にいほる里山交流センター)



「対話の風」(2026年1月、Co-coya) 会場風景
Photo: Yoh Yasuda



風あげの様子(2025年11月、にいほる里山交流センター)
Photo: Naho Matsui

Q1 どのような活動をしていますか？

主に立体と映像を組み合わせたインスタレーションを制作しています。近年は風という伝統的なメディアを用い、風や自然信仰、記憶、人と人とのつながりをテーマに制作しています。布や天然素材による風を中心に、立体、映像、パフォーマンス、ワークショップを横断しながら、日本とインドネシアを拠点に活動しています。デジタル化が進む社会で失われつつある伝統工芸技術や身体感覚、共同性に関心を持ち、風という目に見えない力を媒介に他者や環境と関係を結び直す表現を探求しています。

横浜での活動では、「対話」と「風」をキーワードに、人々の記憶や感情を風のかたちで可視化・共有することをテーマとしました。夢や個人史、移動の経験など言葉にしづらい内面の声を、説明や物語化で回収するのではなく、風に委ねる構造体として立ち上げることを試みました。港町で多文化的な横浜は、このテーマと強く響き合う場でした。「対話の風」は、風を媒介に言語だけではない見えない力(風・芸術・想像力)によるコミュニケーションという意味です。

Q2 この助成をどう活用しましたか？

これまで点在していたリサーチや国際的な実践を、日本の都市文脈の中で検証・深化させることを目的としていました。特に大型の風作品や他者との協働を含むプロジェクトは、制作環境と人的ネットワークを育てる基盤づくりを目指しました。

7月に一週間Co-coyaに滞在し、その後マレーシアとインドネシアで展覧会に参加、展示とワークショップを実施しました。10月に再びCo-coyaに1ヶ月滞在しました。滞在中は風作品の制作と並行して、地域住民や横浜の風職人、国際交流ラウンジで出会った海外ルーツの住民、他分野のアーティストとの交流やリサーチを行いました。

その後、大型の風を制作できる環境が整っているインドネシアに2ヶ月滞在し、集中的に制作を行いました。複数の新作と人形劇とのコラボレーションを実現しました。制作・対話・試作を往復しながら2種類のワークショップを行い、人形劇や音楽家など他分野とのコラボレーションのプロトタイプも形成しました。

Q3 横浜の滞在・活動で得たものは？

横浜の港や風、中山の自然、移動の歴史が重なる環境が、自身の制作テーマと強く響き合っていることを実感しました。一方で、滞在拠点の制約から大型作品の制作が難しく、計画を柔軟に修正する必要もありました。その経験を通じて、「制作すること」だけでなく、「環境やそこに暮らす人々との関係の中でプロセスを共有し、変化させていくこと」の重要性を改めて認識しました。

Co-coyaの滞在期間中、関口さんが地域の方と日常的に交流する機会をつくってくださいました。職人やアーティスト、福祉や教育に関わる方々と出会い、食、農、音、身体表現など、これまで直接関わってこなかった分野とも自然につながり、予想外の協働や対話が生まれました。滞在中には、風をきっかけに新たな来訪者が生まれ、拠点と地域との関係も広がりました。

こうした関係性は一時的な成果ではなく、今後の制作やリサーチを支える持続的なネットワークとなっています。

Q4 今後の展望を教えてください。

今回の滞在を通じて、横浜は制作のための「場所」ではなく、対話と関係性が立ち上がる重要なフィールドとなりました。今後、横浜で生まれたつながりを継続的に育てていきたいと考えています。co-coyaでの一週間の展示には終了後も多くの反響があり、より大きな空間での発表も模索しています。2026年中にはGoni Puppet Theatreをco-coyaに招き、風や風、横浜をテーマにした公開コラボレーション人形劇の実施を目標としています。

本フェローシップでの経験は、10年以上続けてきた実践を社会との関係の中に位置づけ直す契機となりました。風という前時代的とも言われるメディアを通じて横浜、とくに中山地域をリサーチし、多くの出会いと学びがありました。消えかけた文化や技術を継承しながら新たな表現を生み出す意義を再確認しています。今回得た経験とネットワークを基盤に、国内外のプロジェクトや国際展へと展開していきたいと考えています。



Photo: 大野隆介

拠点運営者からのコメント

Co-coya

空き家をリノベーションした職住一体型の地域ステーション。土壁や漆喰、草屋根など自然を感じさせる改装手法が活かされ、多種多様な活動が繰り広げられている。

Q1 アーティスト滞在で得られたものは？

今年度は、リサーチ、制作、展示と3期に渡り滞在され、アーティストと地域の関わりがより深くなりました。滞在が長期だったことで制作活動も間近に見ることができ、アトリエメンバーにも大変刺激になったようで、今年は葉さんのアトリエへ行き、さらに仕事の協働もするようです。

ワークショップ開催にあたって、風あげができる環境を探しましたが、Co-coyaのある緑区は広い公園や田畑のあるエリアにも関わらず見つめるのに苦戦しました。現代の暮らしの中では触れる機会がほぼなく、風が希少な存在となっていることを改めて認識しました。

また、近所の噺家が風あげがでてくる落語を身体に落とし込むためにワークショップに参加し、展示最終日にそのお噺と、今回のために自身初の試みで新作落語を披露してくれました。

他にも、葉さんとご近所の年配の方が風談義をして互いに刺激を受けていたのが印象的でした。その方は、葉さんのために風あげ用の糸巻きを制作したり、展示を観にいらしたり、生活のハリになったとおっしゃっていました。

今回、私たちにとっても、挑戦となり、あらためて地域のことを深く知るきっかけとなりました。

Q2 フェロウシップ助成の3年を振り返って

記録映像も展示されていましたが、葉さんがインドネシアで協働した人形劇団を日本へ呼び、中山で鑑賞する機会を作る話も出ています。アーティストとの関係が一過性のものでなく継続性のある展示や制作滞在ができる、アーティストや場にもそれぞれに時間軸が加わり面白いのではないかと思います。

また、地域でアートに触れる機会を楽しみにされている方も多く、いままで受入れた3名のアーティストを中心に753villageにある複数の拠点を活用したアートフェスを開催できないかという話もあります。滞在アーティストの展示は、さすが!と思う場の使い方をされるので、日常の景色が大きく変容すると想像できます。それをまちの人、特に子供たちの心に触れる機会を作れるとさまざまな変化や多様な価値観への許容が広がるのではと思うので、タイミングが来たら実現したいです。

関口春江
(Co-coya/ひとときデザイン)

審査員レビュー 帆足 垂紀

安田葉は、風をメディアとして活動する作家である。

「風をメディアにしている」と聞くと、バラモン風や江戸風のように伝統的な風に絵を描く姿を想像するかもしれない。しかし、安田の制作はそれらとは一線を画す。彼女が創り出す模様や型の美しさは、「どれだけ風を受け、長く遠くに飛ぶか」という機能的な側面が満たされて初めて真価を発揮する。

彼女が「空に描く絵画」や「飛ぶ彫刻」と表現するその大きな風を制作するには広いスペースが必要であり、飛ばすためには遮るものがない空と強い風が不可欠となる。だが、日本国内でこれらすべての条件を満たす場所を見つけ出すのは容易ではない。

そこで安田は、ACYのフェロウシップ助成を活用してインドネシアのジョグジャカルタへと渡り、風揚げが生活文化として根付いているこの地で、彼女は大型の新作を制作した。滞在中には地元の若き人形師との出会いにも恵まれ、伝統と現代性が交差するコラボレーションを実現させた。帰国後、その経験は横浜の中山のコミュニティ拠点「Co-coya」での活動へとつな

がっていく。インドネシアでの濃密な交流の記録を展示したほか、風の新たな形や模様を地元の多彩な人たちとの対話をとおして模索したのである。

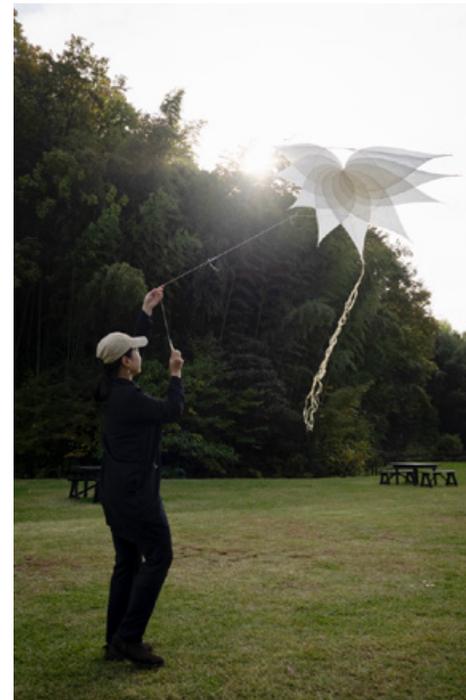
安田の活動を支えているのは、世界各地のカーン・フェスティバルに参加して研鑽を積むことだ。そこでは風の専門家たちが集まり、単なる技術披露にとどまらず、新素材の情報交換や造形美に対する真剣な批評が交わされている。彼女は、風圧に耐える強度を計算しながらも、世界へ持ち運ぶための折りたたみ構造や、不測の破損への対策など、緻密な設計を重ねてその現場に臨んでいる。

こうしたプロセスを経て空に舞う安田の風は、単なるメディアの枠を超え、制御不能な風との対話という新たな地平を切り拓くことができるか。自然の猛威や恩恵を「対話」として受け止め、その先にいかなる問いを立てるのか。この本質的な追及の深まりこそが、彼女の活動を次なるステージへと押し上げる原動力となることを期待する。

2025						2026			
5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
ヒアリング	顔合わせ	拠点滞在		拠点滞在	WS「対話の風」	WS「あなたの風」	インドネシア滞在	風あげ 展覧会	助成報告会
	滞在サポート			チェコセンター東京での展覧会について広報協力				審査員来訪調整 メディア取材調整	
				みどり国際交流ラウンジを紹介		WS運営サポート スパイラルガーデンでの展覧会について広報協力			



「対話の凧」(2026年1月、Co-coya) 会場風景 Photo : Yoh Yasuda



ワークショップ「あなたの凧」の様子
(2025年11月、にいほる里山交流センター)
Photo : Naho Matsui



「対話の凧」(2026年1月、Co-coya) 会場風景
Photo : Naho Matsui



「対話の凧」(2026年1月、Co-coya) 会場風景
Photo : Yoh Yasuda



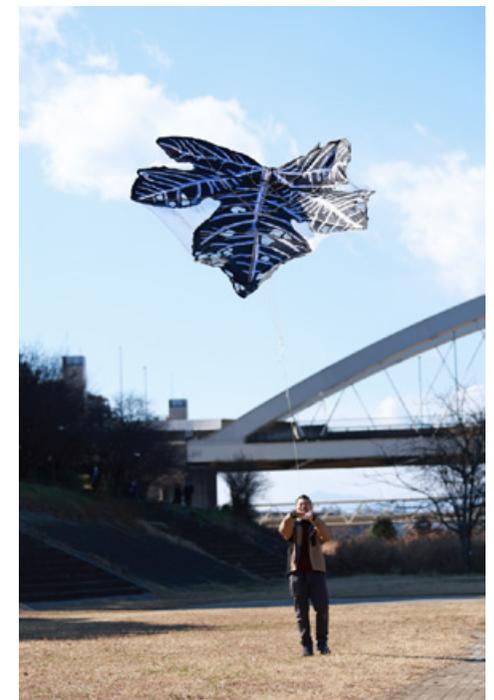
インドネシアでの制作の様子



Photo : Yoh Yasuda



Co-coya滞在中の様子 Photo : Naho Matsui



凧あげの様子(2026年1月、鶴見川河川敷)
Photo : Yushu Ido

継続補助事業

概要 「ACYアーティスト・フェローシップ助成」に採択されたアーティストが、助成対象期間終了後も横浜で活動を展開できるよう、横浜市内で開催する展覧会や公演等に対し、負担金の拠出をはじめとするサポートを行いました。
2025年度は、5名のアーティスト・フェローが横浜市内で作品を発表しました。



Photo : SYSTEM OF CULTURE

加藤 立 2023年度アーティスト・フェロー

展覧会

Ubik

日時

2025年10月10日(金)～23日(木)

10:00～18:00

会場

象の鼻テラス

出品作家

SYSTEM OF CULTURE、加藤立

音楽

TEL-YEE



Photo : Shun Ikezoe

敷地理 2024年度アーティスト・フェロー

公演

水を泳ぐ蝶

日時

2025年12月8日(月)～11日(木)

21:30～23:45

会場

横浜市内ホテル



Photo : 加藤優里

私道 かび 2023年度アーティスト・フェロー

公演

団地のこえ

日時

2025年12月7日(日)13:00～／15:00～

会場

左近山アトリエ131110



Photo : 工藤真衣子

工藤 春香 2024年度アーティスト・フェロー

展覧会

工藤春香＋カプカプ川和

『ここを北極星とする』

第一会場

カプカプ川和

会 期：2026年1月13日(火)～30日(金)

11:00～17:00

休場日：1月16日(金)、18日(日)、25日(日)、26日(月)

第二会場

フォルテ横浜川和

無印良品内コミュニティスペース

日 時：2026年1月13日(火)～30日(金)

10:00～20:00

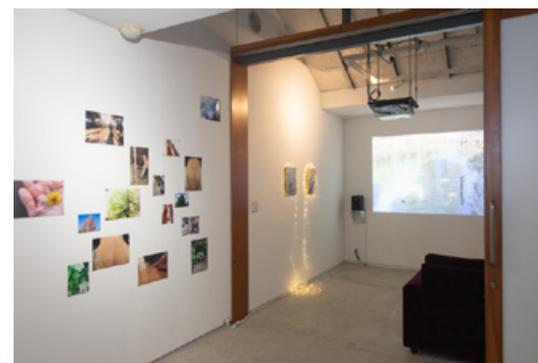


Photo : Liu Shujia

山岡 瑞子 2023年度アーティスト・フェロー

展覧会

Extrication—喪失と歩みの気配—

日時

2026年1月24日(土)～29日(木)

11:00～18:00

会場

高架下スタジオSite-Aギャラリー内
ギャラリー2

2025年度振り返り

「2025年度 ACYアーティスト・フェローシップ助成」では、本報告書で紹介してきたように、採択アーティストはそれぞれ活動の領域や手法は異なりますが、横浜に滞在し、その拠点を中心に地域の人々との交流の中で創作活動を進めました。

今年度の活動を共有する機会として、2026年2月14日に横浜美術館にて、助成報告会を開催しました。過去二年間、横浜市役所アトリウムや象の鼻テラスなどオープンな空間で実施してきましたが、今年度は、よりアーティストのキャリア形成に資する場とすることを目的に、会場を横浜美術館に設定しました。当日は、採択アーティスト4名が一年間の活動成果を発表し、その後、審査員から制作の背景や今後の展望について講評が寄せられました。キュレーターやディレクターなどのアート関係者をはじめ、文化芸術団体の関係者や拠点運営者など35名が来場し、アーティストの活動について専門的な視点から共有する機会となりました。
(助成報告会 開催レポート:<https://acy.yafjp.org/columns/2026/135225/>)

また、活動終了後に実施したアンケートでは、アーティストから「横浜の複数の地域をリサーチでき、地域への理解とネットワーキングができた」「プロジェクトが想定以上に発展し、新しい機会や出会いをいただきました」といった意見が寄せられました。「中・長期のキャリアや作品のビジョンを確立できたか」という設問では肯定回答が100%となり、本プログラムがアーティストの中長期のキャリア形成に寄与していることがうかがえます。また、「横浜市内で新しい人や情報と出会う機会」があったと全員が回答しており、滞在拠点およびACY双方のサポートを通じてネットワーク形成の機会が生まれていたことも確認されました。

アーティストの滞在を受け入れた拠点からも、「(滞在)アーティストはもちろん、それに付随した他のアーティストや活動、またその文化に触れられました」「地域の特性などを知る機会になりました」といった声が寄せられました。「新しい人や団体、情報との出会いがあったか」という設問でも肯定回答が100%となり、アーティストの活動を通じて新たな関係が生まれていることが示されています。

こうした結果から、アーティストと拠点、そして地域の人々の関係が広がり、本プログラムが新たな交流や活動の契機となっていることが確認されました。今後も同様な助成を通じて、アーティストの創作活動と横浜の文化芸術の広がりを支える取り組みを継続していきたいと考えています。



ACY WEB



審査総評



報告会開催レポート

発行	公益財団法人横浜市芸術文化振興財団
企画・編集	同アーツコミッション・ヨコハマ担当 小原光洋、森絵里花
編集・執筆・デザイン	有限会社スタジオニブロール
協力	Aki Iwaya、城戸保、小林勇輝、安田葉 渡辺篤(アートスタジオ アイムヒア) 若林拓哉 (ARUNŌ -Yokohama Shinohara-) 関口春江、大谷浩之介 (Co-coya) 熊谷恵美子、森智佳子 (左近山アトリエ131110) 黒田杏菜、David Kirkpatrick (Murasaki Penguin Project Totsuka)

発行:2026年3月14日

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団
〒231-0023 横浜市中区山下町2
産業貿易センタービル1階

Email acy@yaf.or.jp
URL <https://acyyaf.jp/org/>



安田 葉
凧あげの様子 (2026年1月、鶴見川河川敷)
Photo : Yushu ido



小林 勇輝
「詠春拳プロジェクト」試演会の様子 (2025年9月、MPPT)
Photo : Yulia Skogoreva